

博士論文（要約）

論文題目 平安前期日本漢文学の研究 ——「私」の詠出の軌跡——

氏 名 廖 栄 発

目次

[illegible]

本文

本論文は、「やむを得ない事由②」によって、左記の通り、一部には著作権にかかわる図版があり、インターネット公表に対する著作権者からの許諾が得られていないため、全文を公表することができません。

85 頁左側の図版 引用元 内閣文庫所蔵林羅山手沢本『菅家文草』

87 頁左側の図版 引用元 内閣文庫所蔵林羅山手沢本『菅家文草』

88 頁右側の図版（上部） 引用元 内閣文庫所蔵林羅山手沢本『菅家文草』

88 頁右側の図版（下部） 引用元 石川県立図書館蔵川口文庫善本影印叢書1

『菅家文草』（柳澤良一、勉誠出版、二〇〇八年）

本論文の全部は、「やむを得ない事由⑧」によって、学位授与日である平成31年2月14日から五年以内に単行本等の形で出版予定であるため、全文を公表することができません。

参考文献

【序章】

静永健著『白居易「諷諭詩」の研究』（勉誠出版、二〇〇〇年）上篇第二章「詩集四分類の構想」参照。

谷口孝介著『菅原道真の詩と学問』（塙書房、二〇〇六年）第一章第二節「外交としての贈答詩」参照。

嵯峨朝の詩人たちが、陸奥地域を文学的辺境に、京都の山崎地域を中国の「洛陽」にそれぞれ擬えて、文学的空想の世界を創出していることについては、後藤昭雄「嵯峨朝詩人の表現——文学空間の創造——」（同氏著『平安朝漢文学論考 補訂版』勉誠出版、二〇〇五年）を参照。

藤原克己著『菅原道真 詩人の運命』（ウェッジ選書、二〇〇二年）六五頁。

後藤昭雄「宮廷詩人と律令官人と——嵯峨朝文壇の基盤——」（前掲同氏著『平安朝漢文学論考 補訂版』）に詳しい。

藤原克己「吏隠兼得の思想——勅撰三集の精神的基底——」（同氏著『菅原道真と平安朝漢文学』、東京大学出版会、二〇〇一年）参照。

後藤昭雄「文人相軽」（前掲同氏著『平安朝漢文学論考 補訂版』）に詳しい。

藤原克己「小野篁の文学」（前掲同氏著『菅原道真と平安朝漢文学』）に詳しい。

田坂順子「都良香の「哭兒通朗」をめぐる」（『平安文学研究』六十九輯、一九八三年七月）に詳しい。

宋哈「都良香に見る散文創作の新動向——コンテキストの構築——」（『和漢比較文学』第六十一号、二〇一八年八月）参照。

藤原克己氏「文章経国思想から詩言志へ——勅撰三集と菅原道真——」、「菅原道真の詩と思想」など（前掲同氏著『菅原道真と平安朝漢文学』）。

宋哈「平安朝漢文学における自序の系譜——文人の自己形成——」（東京大学文学部国文学研究室編『東京大学国文学論集』第十一号、二〇一六年三月）参照。

【第一章】

滝川幸司「詩臣としての道真」（同氏著『菅原道真論』塙書房、二〇一四年）参照。

滝川幸司「島田忠臣の位置」、「応制詩の述懐——勅撰三集から菅原道真へ——」（前掲同氏著『菅原道真論』）参照。

金原理『『田氏家集』の諸本——『松平文庫本』を中心として——』（同氏著『平安朝漢詩文の研究』九州大学出版会、一九八一年）

『擲金抄』下（絶句部・詠史）には、「常恨許由非二大隠一／能藏二形跡一不レ蔵レ名」（許由）と「惆悵五湖湖上月／越王終不レ見二扁舟一」（范蠡扁舟）という『田氏家集』に見えない忠臣の詠史詩の佳句が二つ収録されている。これは或いは忠臣がここにいう詠史詩群の残存作品か。

『類聚国史』（巻百四十七、文部下、講国史）によれば、元慶六年（八八二）に行われた日本紀竟宴では、『日本書紀』の中の聖帝や名臣らを取り上げられ、「詠史和歌」がよまれた。因みに、この日本紀講読が開講した元慶二年、忠臣の弟である良臣（よしおみ）が侍読を補佐する重要な役割である都講（ところ）を務めていた。

「貼」は、『釈』が日本詩紀本により校訂した案。『注』は底本の「始」のまま。頸聯の下句は『論語』（陽貨）の「子曰く、紫の朱を奪ふを惡む」を踏まえ、正色の朱（一流の詩作の喩え）が占めるべき屏風を己の拙い詩が占めていることを意味する。

川口久雄著『三訂 平安朝日本漢文学史の研究 上』（明治書院、一九七五年）一八五頁

道真の応制詩には、五言律詩は六首（008' 048' 056' 083' 173' 435）、五言排律は二首（010' 332）、七言排律は五首（144' 354' 434' 438' 449）、七言絶句は十二首（337' 355' 369' 371' 376' 383' 427' 441' 455' 456' 460' 468）とある。以上は、谷口孝介氏の『菅家文草』『菅家後集』の詩体と脚韻」（同氏著『菅原道真の詩と学問』塙書房、二〇〇六年）の「分体表」を参照した上で統計した。

滝川幸司著『天皇と文壇』（和泉書院、二〇〇七年）の序論に詳しい。

翌昌泰四年、大宰府に左遷された道真は「去年今夜侍二清涼一／秋思詩篇独断腸」（482「九月十日」）と詠じて回顧しており、特に傍線句の下に「勅賜二秋思一賦レ之。臣詩多述レ所レ憤」と、道真は自注を付けて、その時に作った応制詩の内実を語っている。

本章で取り上げた①②③の三首の积奠詩について、波戸岡旭氏に「島田忠臣の积奠詩」（同氏著『奈良・平安朝漢詩文と中国文学』笠間書院、二〇一六年）の論がある。その中で氏は、学儒の本道を行くことをこそ望んでいた忠臣は、典藥頭という職分に満足していない、と同じような見解を示している。

最後の一句を、『注』は「韋編三絶 仁君と為る」と訓み、「我が君も、晩年の孔子のように、綴紐が三度も擦り切れるほどこの周易を御精読下さり、慈悲深い名君となられたのである」と訳し、『釈』は「韋編三絶 仁君を為はむ」と訓み、「今、孔子のようにこの『周易』をくり返し閲読しては、徳高きわが帝のことを思い申し上げたいと念じております」と訳しているが、筆者はいずれも採用しない。忠臣が制作した序文に「於レ是有レ勅……別駕忠臣、討二其微義一」とあるから、筆者はこの尾聯を、忠臣が今後も天皇のために『周易』の奥義を引き続き研究したいという意志表明と解する。

私見では、この賦の中間部分「既馴二洽於郊甸一、亦騰二倚於山隅一。素毳呈レ彩、霜毫応レ図」も忠臣の中間二聯の構成にヒントを与えたのであろう。

漢代の官人・鄭弘が善政を行った結果、白鹿が出現して彼の車のこしきを挟んだ。

このことを宰相に栄転する瑞兆だと人が予言した（『藝文類聚』巻九五、猷部下、鹿）。

この点は早く後藤昭雄氏が「菅原道真の詠竹詩」（同氏著『平安朝文人志』、吉川弘文館、一九九三年）の中で指摘している。

【第二章】

藤原克己「吏隠兼得の思想 —— 勅撰三集の精神的基底 ——」（同氏著『菅原道真と平安朝漢文学』、東京大学出版会、二〇〇一年）参照。

吉川忠夫「白居易における仕と隠」（『白居易研究講座』第一巻、勉誠社、一九九三年）参照。

忠臣の脱俗隠逸の思想の背後に、自分自身の処遇を含めて官人社会のあり方に対する嘆きや批判があることは、すでに中尾正己「平安文人の仏教信仰 —— 島田忠臣の場合 ——」（『印度學佛教學研究』第三十五巻第一号、一九八六年十二月）、「同題 —— 貞観・寛平期の文人達 ——」（同誌第三十八巻第一号、一九八八年十二月）に注目されている。

芳賀紀雄「少壮の日の島田忠臣 —— 少外記任官まで——」(『ことばとことのは』第五集、和泉書院、一九八八年)、滝川幸司氏「島田忠臣の位置」(同氏著『菅原道真論』塙書房、二〇一四年) 参照。

『田氏家集』には「奉レ餞二紀大夫累出刺一レ肥、聊因二詩酒一、各分二一字一得レ行」(巻上・043) という詩があり、忠臣と紀夏井との親交が窺える。

波戸岡旭「島田忠臣の釈奠詩」(同氏著『奈良・平安朝漢詩文と中国文学』笠間書院、二〇一六年) 参照。

『注』によると、「藏人所は、詔勅の伝宣に関係したから、自分に久しく昇位昇官の沙汰がないのは、同士たちが、いつも自分にかかわる部分を省略して短くしているためだと戯れたものと解される」と。因みに、頷聯の訓みは、後藤昭雄氏「平安朝詩文の「俗語」」(同氏著『平安朝漢詩文の文体と語彙』勉誠出版、二〇一七年)の指摘に従う。

詩題には「卅字絶句」とあるが、一句目は五字、二句目は七字、三句目と四句目とは九字となっており、絶句の定型の形式を踏まない。或いは「卅字絶句」を「卅字にして句を絶つ」と解すべきか。

波戸岡旭「白居易「閑適」詩と島田忠臣の詩境 —— 島田忠臣詩に見える白居易詩境からの行禅の享受——」(前掲注⑥同氏著書所収) に指摘。

静永健著『白居易「諷諭詩」の研究』(勉誠出版、二〇〇〇年) 下篇第一章「江州左遷と諷諭詩」参照。特に、「放魚」に見られる「双白魚」と「東林寺白蓮」に見られる「白」と、「文柏牀」に見られる「柏」がいずれも白居易の「白」に音通して、白居易自身の投影であろうことは氏に指摘されている。

因みに、当該詩の題に見られる「直疏」については、小島憲之氏はその凌雲集詩注において、朝廷に直接たてまつる「上疏文」と解釈しているが、筆者は「春の日に田に帰って(自分の心情を)率直に記す」という風に解釈する。筆者の解釈を支持する二つの用例を挙げたい。まず、小野岑守の「竹樹新栽、流水遠引、即レ事有レ興、把レ筆直疏」(『経国集』巻十一) という詩題に、「直疏」の用例が見られる。また、初唐の大詩人・王績に「春旦直疏」という詩があり、ある春の朝に古今の事を思い出して発した感慨をそのまま率直に記したものである。

後藤昭雄「嶋田忠臣論断章」(同氏著『平安朝文人志』吉川弘文館、一九九三年)に詳しい。

『釈』はこの二句を「この私はあくせくとして飽き疲れることも知らず、また忙しくしている。何と悩み多く、苦勞を手にすることが長いことよ」と訳している

前掲注⑨波戸岡旭「白居易「閑適」詩と島田忠臣の詩境」。

因みに、蟠桃が東方の、日が出る所とされるこうした発想は、『芸文類聚』（巻九一、鳥部中）にみえる『玄中記』曰、東南有二桃都山一、上有二大樹一、名曰二桃都一、枝相去三千里。上有二天鷄一、日初出、照二此木一、天鷄則鳴、天下鷄皆隨レ之鳴」や、『荊楚歲時記』にみえる『括地圖』曰、桃都山有二大桃樹一、盤屈三千里、上有二金鷄一、日照則鳴」といった伝説を下敷きにしていると思われる。

金原理「嶋田忠臣と白詩」（同氏著『平安朝漢詩文の研究』、九州大学出版会、一九八一年）。

前引の『後漢書』（逸民伝）において、李賢は嵇康の「高士伝」を引用して「君公明レ易、為レ郎。数言レ事不レ用、乃自汗下与二官婢一通上、免帰。詐狂僮レ牛、口無二二価一也」と注している。つまり、王君公はしばしば政事に関して朝廷側に進言したけれども、まったく採用されなかった。そこで、彼は自ら官婢と密通しているという汚名を着て、その結果、思い通り朝廷に罷免された。いわば、王君公は自分で宮仕えから逃れたのである。忠臣詩がいう「王郎遁二主恩一」は、或いはこの李賢注に基づくものであろう。

岩井宏子「島田忠臣の納涼詩における白詩受容——「夏日納涼」を中心に——」（『白居易研究年報』第五号、勉強出版、二〇〇四年）に詳しい。

これらの「具象化された閑適空間」については、近年、宋哈氏は「菅原道真「書齋記」試論——閑居文学の変奏——」（『国語と国文学』二〇一五年四月号）や「隠棲後の兼明親王の文学——孤高と閑適——」（『和漢比較文学』第五十五号、二〇一五年八月）において、一連の検討を行った。

【第三章】

金原理「嶋田忠臣と白詩」（同氏著『平安朝漢詩文の研究』所収、九州大学出版会、一九八一年）、三木雅博「嶋田忠臣と白詩」（『白居易研究講座』第三巻所収、勉強社、一九九三年）、新聞一美「わが国における元白詩・劉白詩の受容」（『白居易研究講座』第四巻、一九九四年）など。

「故令」二字は私案ではあるが、『注』も『釈』も底本の「故今」を採らず「教令」に校訂する。

因みに、張籍のこの詩に対して、裴度も返詩を作った。また、張籍あるいは裴度の詩に対して、白居易のほか、当時の大文人たち韓愈・元稹・劉禹錫・李絳・張賈らも唱和詩を作ったが、忠臣の当該詩は主に白詩の影響を受けていると思う。

基経のほうも、自分が白詩における裴度に擬えられていることを分かっているとされる。基経の白詩理解の深さについては、三木雅博「平安朝文人と『白氏文集』——どう向き合い、どう用いたか——」（同氏著『平安朝漢文学鉤沈』和泉書院、二〇一八年）参照。

『扶桑集』巻七に「哀傷部」という部門があり、その中には更に「悼亡」「哭兒」「墳」「病」「嘆」と五つ分けている。「悼亡」という分類には、菅原道真の「傷二藤進士一呈二東閣諸執事一」や「到二河陽駅一有レ感而泣」などが収録されている。この二首の詩はいずれも妻の死を悲しむものではない。

「泉途」は冥途、黄泉の国の意。「途」は『釈』の意改。『注』は底本の「逢」のまま。筆者は『釈』の案に従う。因みに、『釈』が指摘していないが、『文選』（巻五十七、謝莊「宋孝武宣貴妃誄」）には「皇帝痛二掖殿之既闋一、悼二泉途之已宮一」と、『菅家文草』巻二・100「喜レ被三遥兼二賀員外刺史一」には「月俸曾因レ含レ哺飽、泉途更欲二計レ恩酬一」と、「泉途」の用例が見える。

亡き人を悲しむ涙が雨となって冥途まで流れてゆくというような発想は、『古今集』巻十六「哀傷歌」の巻頭に飾る小野篁の「泣く涙雨と降らなむ渡り川水まさりなば帰ってくるがに」を想起させよう。

忠臣詩の「恵死莊收磧」は白詩の「恵死莊杜口」を模倣したものに違いないが、「磧」（『広韻』に「磧、柱下石也」とある）では意味不通のため、『注』と『釈』は諸本の「磧」を採用せず、後述する『莊子』の故事によって「質」に改めた。しかし、「質を収む」（質は相手や対象の意）という表現は依然として意味が通じないと思う。本章では、しばらく「磧」のままにする。一方、「弦」との対句関係から考えれば、『初学記』（交友）の事対に「伯牙絶レ絃 郢人運レ斤」とあり、また初唐・駱賓王の「夏日遊二德州一贈二高四一」に「成レ風郢匠斫（斫）／流レ水伯牙弦」とあるように、同じ『莊子』の故事に見られる郢人の斧を意味する「斤」（平字）もしくは「斫」（仄字、「斫」はその異体字）は一案としては可能かと思う。しかし、「恵

死莊收斂」のように郢人ではなく莊子が斂を収むといった言い方はやはり不自然であろう。後考に待つ。

引用文は新釈漢文大系本『莊子』（明治書院、一九六七年）による。

前掲新聞氏論文と三木雅博「平安朝における「劉白唱和集解」の享受をめぐる」、『白居易研究年報』第2号、勉誠出版、二〇〇一年）参照。

蔵中スミ「嶋田忠臣年譜覚之書」（前掲『注』巻之上所収、初出は一九七三年）参照。

後藤昭雄「嶋田忠臣論断章」（同氏著『平安朝文人志』所収、吉川弘文館、一九九三年）参照。

「恨」は本来欠字。『注』は「意」を補ったが、「別恨」などの可能性も提示しており、筆者は「別恨」を採りたい。因みに、『釈』も「別恨」を採っている。

後述する三首目の道真詩の尾聯の「別駕先年罷レ官、未レ得二放還一」という自注から知られる。

焼山廣志「菅原道真の詩に投影されている白居易・元稹の唱和詩について（その一）」（『九州大学国文』23、一九九四年七月）、及び「同（その二）」（熊本大学『国語国文学研究』32、一九九七年二月）参照。因みに、この唱和詩群の梅に注目した波戸岡旭氏の「島田忠臣との応酬詩にみえる梅花」（同氏著『宮廷詩人 菅原道真——『菅家文草』・『菅家後集』の世界——』二三二頁以降）の論がある。

もちろん、道真と忠臣の唱和詩の基調は、元白のそれといささか異なるように思う。当時、元稹は四十六歳（越州刺史）、白居易は五十三歳（杭州刺史）。世の中は依然として騒がしいけれども、人生の波瀾を乗り越えてきた二人は、だんだん心静かに老年へ辿り着いている。こうした心境の下に交わされた元白の唱和詩の基調は任地の優れた風光を楽しむものである。例えば、元詩の頸聯「氷消二田地一蘆錐短／春入二枝条一柳眼低」は早春の風光をうたうもので、『和漢朗詠集』「早春」部の劈頭に飾られている名句である。しかし、忠臣と道真の唱和詩が白居易の交友文学の影響を承けているのは間違いないと思う。

【第四章】

興膳宏著『古代漢詩選』（研文出版、二〇〇五年）第七章「島田忠臣——叙情の

深化」参照。

この詩は、「一面新交不レ忍レ聴、況乎郷国故園情」という一聯のみ現存。後藤昭雄『本朝書籍目録考証』補（同氏著『本朝漢詩文資料論』勉誠出版、二〇一二年）の「本朝秀句」条に指摘。

白居易には「有ニ小白馬一、乗馭多時、奉レ使東行、至ニ稠桑駅一、溘然而斃、足レ可ニ驚傷一、不レ能レ忘レ情、題ニ二十韻一」（『白氏文集』卷五十五・2546）の作例がある。

田坂順子「都良香の「哭児通朗」をめぐって」（『平安文学研究』六十九輯、一九八三年七月）に詳しい。

三木雅博「島田忠臣と在原業平——漢詩が和歌を意識し始めた頃——」（『平安朝漢文学鈎沈』和泉書院、二〇一八年。初出は二〇〇一年）。氏はこの論考で、忠臣詩の「藤」「月」「春心」の詠出には、和歌的な発想や詠法が存したことを指摘している。

『古今和歌集』と『万葉集』の引用は、新編日本古典文学全集による。

因みに、唐代に至って、『旧唐書』（狄仁傑伝）に「其親在二河陽別業一、仁傑赴二并州一、登二太行山一、南望見二白雲孤飛一、謂二左右一曰、「吾親所レ居、在二此雲下一」。瞻望佇立久レ之、雲移乃行」とあるように、「望レ雲思レ親」の故事さえ生まれた。

「懷旧」という詩については、仇兆鰲が「此悼二蘇之亡一而自傷レ失レ侶也」と注しているように、友人の蘇源明を失ったことを悼む詩作である。

もちろん、中国では亡くなった女性の靈魂を雲や雨に見立てる伝統もあるが、それは宋玉の「高唐賦」（『文選』卷十）の「妾在二巫山之陽、高丘之阻一、旦為二朝雲一、暮為二行雨一」に基づくものと思われる。上記の光源氏の哀傷歌が詠われた後日、葵の上を偲ぶ場面に劉禹錫が愛人の死を悲しむ「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」の詩句が引用されているが、劉の詩句もこの「高唐賦」を下敷きにしていることは、周知の通りである。

田坂順子『扶桑集』全注釈（二）（『福岡大学総合研究所報』120、一九九〇年二月）参照。

『注』と『釈』の底本は群書類従本であるが、金原理氏が『田氏家集』の諸本を検討した結論によると、松平文庫本は最も忠実に原型を伝えているテキストである

という。金原理氏『田氏家集』の諸本——『松平文庫本』を中心として——」（同氏著『平安朝漢詩文の研究』九州大学出版会、一九八一年）参照。

王晓平『田氏家集』的写本研究」（原中国語簡体字）、『日語学習与研究』二〇一六年第四号。

「夢阿満」という名作はよく取り上げられているが、就中、田坂順子氏が「菅家を継ぐ者——道真の「夢二阿満」を読む——」（和漢比較文学会編『菅原道真論集』勉誠出版、二〇〇三年）という論考で、道真が自身の文道の跡継ぎとしての息子を失った意味の重さを白居易のそれに照らして指摘したことは重要だと思う。

興膳宏氏は前掲注③『古代漢詩選』（第八章「菅原道真——その長編古詩」）において、この「哭二奥州藤使君一」を取り上げて分析し、「これは単に不遇の中で倒れた友を哀悼するだけの内容ではなく、道真自身の現在の状況を友の身に重ね合わせながら、肺腑をえぐるような痛切な響きを以て、運命の不条理を訴えかけている」と指摘している。

【第五章】

李宇玲著『古代宮廷文学論』（勉誠出版、二〇一一年）第五章「菅原道真と省試詩」参照。

芳賀紀雄「少壮の日の島田忠臣——少外記任官まで——」（『ことばとことのは』第五集、和泉書院、一九八八年）

佐藤信一『菅家文草』卷一注釈稿（五）」（『白百合女子大学研究紀要』第三十二号、一九九六年）

本間洋一『菅家文草』をめぐって——菅原道真没後一一〇〇年にむけて——」（『同志社女子大学日本語日本文学』第十三号、二〇〇一年六月）。

佐藤信一『菅家文草』卷一注釈稿（四）」（『白百合女子大学研究紀要』第三十一号、一九九五年）

小島憲之『古今集以前』（塙書房、一九七六年）二六五頁以降参照。

渡辺秀夫「古今集歌の表現と漢詩」（『平安朝文学と漢文世界』第一篇第一章所収、勉誠社、一九九一年）参照。

焼山廣志「道真の詩に投影された『白氏文集』——「水鷗」の詩をめぐって——」（熊本大学『国語国文学研究』一九八七年九月）参照。

因みに、金子彦二郎氏は『増補 平安時代の文学と白氏文集——句題和歌・千載佳句研究篇——』（培風館、一九五五年、九四頁）において、次のように述べており、道真の水鷗の本文を「談」ではなく「訝」を採用している。「樂天秋雪詩の「草訝（〇）二霜凝重一。松疑（〇）二鶴散遲一。」の對句が、道真などによつて注目されて其の水鷗詩に「飛疑（〇）二秋雪（〇〇）落一。集訝（〇）二浪花勻一。」の如き攝取利用が營まれると、以後此の句形を學ぶものが續々として出現していく」と。また、本間洋一氏は『菅家文草』断章——漢詩の本文と解釈をめぐる覚書——」（『同志社女子大学日本語日本文学』第二十九号、二〇一七年六月）において、「誤」と「訝」を両方とも可能な本文として提出している。

石川県立図書館蔵川口文庫善本影印叢書『菅家文草』（柳澤良一編集、勉誠出版、二〇〇八年）。川口久雄氏は、この藤井旧蔵本を大系本の底本に用いた。

『和漢朗詠集』の引用は、三木雅博訳注『和漢朗詠集 現代語訳付き』（角川文庫、二〇一三年）による。詩句の解釈なども三木氏のそれを参考した。

【第六章】

高兵兵「菅原道真の居住観と白居易——地方の住まいを中心に——」（福井大学『国語国文学』四十七号、二〇〇八年三月号）。

詩題の中の「改元」は、元禄刊本に従う。大系本は「開元」に作る。

柳澤良一『菅家後集』注解稿（十七）」（『金沢学院大学紀要 文学・美術・社会学編』二〇〇八年三月号）を参照。なお、白詩にはもう一つ「海墻」の用例がある。

「奉レ酬三淮南牛相公思黯見レ寄二二十四韻一」（卷六十六・3289）という詩の第七聯「籃輦遊二嵩嶺一／油幢鎮二海墻一」に見え、淮南節度使に任じられた牛僧孺のことを褒め称えているものである。この「海墻」は長江の畔に位する揚州を指すが、当時の揚州は淮南節度使の治所であった。

新間一美「源氏物語の「浮舟」と白居易の「浮生」——莊子から仏教へ——」（『白居易研究年報』第十六号、勉誠出版、二〇一五年）、同「白居易・道真・芭蕉と旅——「浮生」を生きる——」（『東アジア比較文化研究』第十六号、二〇一七年六月）、三木雅博「舟行五事」における『莊子』の位置づけ——白居易「江州左遷旅中詩」における『莊子』の位置づけとの比較において——」（『国語と国文学』二〇一八年

五月号) 参照。

三木雅博・谷口真起子「行春詞」札記(三木氏著『平安朝漢文学鉤沈』和泉書院、二〇一八年所収、初出は二〇〇三年)。以下、〈札記〉と称す。

波戸岡旭「菅原道真『讃州客中詩』——「行春詞」を中心に——」(同氏著『奈良・平安朝漢詩文と中国文学』所収、笠間書院、二〇一六年) 参照。

後藤昭雄「菅原道真の詩と律令語」(同氏著『平安朝漢詩文の文体と語彙』勉誠出版、二〇一七年、初出は一九八一〜一九八二年)

後藤昭雄「平安朝詩と律令語」(同氏著『平安朝漢詩文の文体と語彙』勉誠出版、二〇一七年、初出は一九八四年)

三木雅博「菅原道真「讃州客中詩」の形成と「詩人無用」論」(同氏著『平安朝漢文学鉤沈』和泉書院、二〇一八年、二六四頁)

藤原克己『菅原道真と平安朝漢文学』(東京大学出版会、二〇〇一年) 二二二頁。

藤原克己『菅原道真 詩人の運命』(ウェッジ選書、二〇〇二年) 一三六頁。

『菅家文章』には「松蘿任土枕江湄／明月春風不失期(松蘿 土に任して江湄に枕す／明月春風 期を失はず)」(巻二・178「園池晚眺」と、「明月」と「春風」との組み合わせの詩例がもう一つ見いだせる。この詩は屏風絵の題画詩なので、明月が照らす園池、そのほとりの木々は春風に軽く吹かれている屏風絵の景色などを詠じているものである。この実際の景物としての「明月春風」は、詩興をかき立てるものや詩文の制作を意味する「路遇白頭翁」の「明月春風」と違っていると思われる。

先行研究によれば、「風月」は詩興をかき立てるものだけではなく、詩文の制作そのものを指す場合もある。大曾根章介「風月」攷——菅原道真を中心として——」(同氏著『日本漢文学論集』第一巻、汲古書院、一九九八年)や、後藤昭雄「風流の「文」と詩歌」(河野貴美子・Wiebke DENCKE・新川登亀男・陣野英則編『日本「文」学史』第一冊、勉誠出版、二〇一五年) 参照。

朱金城『白居易集箋校二』(上海古籍出版社、一九八八年) 七七二頁。

波戸岡旭著『宮廷詩人 菅原道真——『菅家文章』・『菅家後集』の世界——』(笠間書院、二〇〇五年) 第三編第一章「讃岐守時代——「失道」の時代——」 参照。

谷口孝介著『菅原道真の詩と学問』(塙書房、二〇〇六年) 第一章第四節「詩人の感興——菅原道真「讃州客中之詩」啓進の意図——」 参照。

菅野禮行氏は『平安初期における日本漢詩の比較文学的研究』（大修館書店、一九八八年）第二編第二章第二節「道真の詩における日本文芸的要素」において、道真の作品の中に見られる「詩人」の用例を検討し、「道真が白詩を念頭におきながら志向した文学的情趣は、まさにしみじみとした風趣であって、「もののあはれ」の情緒的な美と通い合うものがある」と指摘している。

前掲波戸岡旭「菅原道真「讃州客中詩」——「行春詞」を中心に——」参照。

三木雅博「菅原道真「讃州客中詩」の形成と「詩人無用」論」、「舟行五事」札記」（同氏著『平安朝漢文学鈎沈』和泉書院、二〇一八年所収）参照。

前掲藤原克己『菅原道真 詩人の運命』一四七頁。

【第六章の付章】

大系注は「旅人たる私は、（客愁のため毎夜睡らないので、）三戸を守っているわけである。（別に庚申の夜に限らない。）」と解釈している。

瞿蛻園『劉禹錫集箋証 中』（上海古籍出版社、一九八九年）一〇三〇～一〇三一頁、卞孝萱校訂『劉禹錫集』（中国古典文学基本叢書、中華書局出版、一九九〇年）四一七～四一八頁参照。

柴格朗訳注『劉白唱和集（全）』（勉誠出版、二〇〇四年）一一〇頁～一一三頁参照。ただし、筆者の試訳は、柴氏の理解と違ったところがあるが、ここでは一々注記するのを省略する。

渋谷啓一氏「寒早十首」が描く民衆の姿について「『歴史評論』（710）、二〇〇九年六月

「寒早十首」における律令語については、大系注のほか、主に後藤昭雄「菅原道真の詩と律令語」（同氏著『平安朝漢詩文の文体と語彙』勉誠出版、二〇一七年、初出は一九八一～一九八二年）、滝川政次郎「憶良の貧窮問答歌と菅公の寒早十首」（『日本歴史』四〇四、一九八二年一月）参照。

谷口孝介氏は、二〇一六年度中古文学会秋季大会（二〇一六年十月二十二日）で行った「菅原道真「寒早十首」の構成と表現」の発表で指摘している。

本章に引用する元稹の詩文は、周相録『元稹集校注』（上海古籍出版社、二〇一一年）に従うが、括弧内に花房英樹・前川幸雄『元稹研究』（彙文堂書店、一九七七年）

所収の「作品総合表」の作品番号を示す。因みに、本章の元稹文学に対する基本的な把握は、主に両氏『元稹研究』、及び呉偉斌『元稹評伝』（河南人民出版社、二〇〇八年）による。

藤原克己著『菅原道真 詩人の運命』（ウェッジ選書、二〇〇二年）一二二頁。

石破洋「わが国における元稹詩の受容——菅原道真の場合——」（富山大学『国語教育』第一号、一九七六年）

楊国荣「論唐代組詩的声律技巧」（『福建農林大学学报（哲学社会科学版）』二〇一二年三月号）及び同氏の博士論文『唐代組詩研究』（二〇一二年六月）参照。中国語の「組詩」は連作詩の意味。

大系本は「暗」を「時」に作る。

『旧唐書』（元稹伝）に「長慶初、潭峻帰レ朝、出二稹「連昌宮辞」等百余篇一奏御。穆宗大悦、問稹安在。対曰、「今為二南宮散郎一」。即日転二祠部郎中・知制誥一」とある。

【第七章】

例えば、波戸岡旭著『宮廷詩人 菅原道真——『菅家文草』『菅家後集』の世界——』（笠間書院、二〇〇五年）序論第二章「菅原道真の詩観」や、藤原克己著『菅原道真と平安朝漢文学』（東京大学出版会、二〇〇一年）所収二—2「文章経国思想から詩言志へ」（主に第三節「詩は志を言ふ」——詩の原点——）、三—1「詩人鴻儒菅原道真」（特に第三節「道真の政治参加」）、三—2「詩人の倫理」（主に第二節「王沢の詩」）など。本章では、藤原氏のこれらの論考に言及する際に、「藤原十頁数」のかたちで示す。

彌永貞三「古代の釈奠について」（『日本古代の政治と史料』高科書店、一九八八年、初出は一九七二年）。

この校訂は、滝川幸司氏が「仲春釈奠聴講孝経同賦資（事）父事君——菅家文草・本朝文粹の校訂をめぐって——」（『国文論藻 京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』第十六号、二〇一七年）において行っている。

この序文の本文は『菅家文草注釈 文章篇 第一冊』（文草の会著、勉誠出版、二〇一四年）によるが、読み下し文は改めたところがある。

谷口孝介氏は、二〇一六年度中古文学会秋季大会（二〇一六年十月二十二日）で行った「菅原道真「寒早十首」の構成と表現」の発表で指摘。

藤原克己著『菅原道真 詩人の運命』（ウェッジ選書、二〇〇二年）一四九頁。因みに、藤原氏はこの詩の尾聯を「この讃岐の国の景勝にも、本来所有など無いはずなのに、ここでも権勢家による土地の兼併が進んでいるということ、いずれ自由に逍遥することもできなくなるかもしれない」と訳している。

「奉二昭宣公一書」は、道真に関する著書に必ず言及される資料である。注⑥に掲げた『菅原道真 詩人の運命』の第三章第二節「阿衡の紛議」など参照。

滝川幸司氏は、この句を「累卵相ひ思ふ 長く歩を失ひしを」と訓んで、「讃岐から都へ戻った道真自身が、都を離れていたために都でのことを忘れてしまつて、とまどう姿を描くのであらう」と解釈している。同氏著『菅原道真論』（塙書房、二〇一四年）第二編第二章「時平と道真——『菅家文草』所収贈答詩をめぐる——」参照。

大系注はこの尾聯を、「秋の風が吹くと香の芳しい蘭も朽ち敗れてしまうのが残念だ、その余香は他人に薫染せられない」と解釈している。

大系注は、この「微諫」は前述した検税使派遣の再審議と見ている。

この点は早くに後藤昭雄氏が「菅原道真の詠竹詩」（同氏著『平安朝文人志』、吉川弘文館、一九九三年）の中で指摘している。

前掲藤原克己著『菅原道真 詩人の運命』二二〇～二二四頁参照。

前掲藤原克己著『菅原道真 詩人の運命』一九八頁参照。

李宇玲著『古代宫廷文学論』（勉誠出版、二〇一二年）第六章「夕霧の学問——字の儀式から放島試へ——」参照。

谷口孝介『菅原道真の詩と学問』（塙書房、二〇〇六年）序章第二節「史としての詩——詩序の拓くもの——」参照。

【第八章】

木雅博「紀長谷雄の「山家秋歌」をめぐる——白詩享受の一端——」（『中古文学』二十三号、一九七九年四月）に詳しい。

後藤昭雄「文人相軽」（前掲同氏著『平安朝漢文学論考 補訂版』、初出は一九七

三年）に詳しい。

藤原克己「文章経国思想から詩言志へ——勅撰三集と菅原道真——」、「菅原道真の詩と思想」（同氏著『菅原道真と平安朝漢文学』東京大学出版会、二〇〇一年）など。

滝川幸司「詩臣としての道真」（同氏著『菅原道真論』塙書房、二〇一四年）

【校異】「或」——新大系本では「惑」に校訂されているが、本章では、身延山本のままに「或」を採用する。つまり、「世之或者、多嘲二文士一」を「世の一部の人たちは、しばしば文士の私たちを嘲っている」と解釈する。そもそも、「詩人無用論」を持ちだした人は、詩そのものが本当に「有用」なのかどうかを「疑惑」していたというより、「詩人無用論」をもって長谷雄や道真ら詩人派を攻撃するのが目的だっただろう。この一部の人たちに対して、長谷雄は「世之或者」と、暗にほめかしていると考えられる。

「春風歌」は寛平二年正月二十一日内宴の詩題。島田忠臣は七言八聯十六句の正格な排律（『田氏家集』卷下所収）を作ったが、長谷雄は三五七の雑言詩を作った。前掲した川口久雄著『三訂 平安朝日本漢文学史の研究 上』二三一〜二三二頁を参照。

前掲藤原克己著『菅原道真と平安朝漢文学』二六三頁。なお、長谷雄のこのような王朝文人のありようの重要性については、同著の二五九頁以降「王朝の文人」を参照されたい。氏に明らかにされたそのありようの輪郭をよりいっそう浮彫にするには、新出資料がなければきわめて困難かもしれないが、本章が述べてきた長谷雄における公私世界の大転換は、氏の巨視的な視点を裏付けて再確認することができらるだろう。

「句題詩」について、佐藤道生「句題詩概説」（同氏編『句題詩研究 古代日本の文学に見られる心と言葉』慶応義塾大学出版会、二〇〇七年）に詳しい。

【第八章の付章】

『新撰朗詠集』の引用は、和歌文学大系本『和漢朗詠集・新撰朗詠集』（佐藤道生・柳澤良一校注、明治書院、二〇一一年）による。

渡邊秀夫著『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、一九九一年）三三二頁以降「紀長

谷雄・略年譜」参照。

後藤昭雄著『本朝文粹抄 五』（勉誠出版、二〇一八年）一六三―一六四頁参照。

本章の『類聚句題抄』の引用は、本間洋一氏の『類聚句題抄全注釈』（和泉書院、二〇一〇年）による。その底本は、続群書類従本写本である。

李宇玲著『古代宮廷文学論』（勉誠出版、二〇一一年）第四章「平安朝における唐代省試詩の受容——九世紀後半を中心に——」参照。

要旨

本博士論文の目的は、平安朝の詩人たちがいかに漢詩を通して自己（「私」）を表現してきたかという視点から、平安朝詩史の構築を試みることである。本論文は、**「第一部 島田忠臣の文学の位置」「第二部 菅原道真の文学の位置」「第三部 紀長谷雄の文学の位置」**からなる。序章および附章を含めて、全十一章となっている。

序章「平安朝漢文学の転調——「公」と「私」のあいだ——」では、紀長谷雄が「延喜以後詩序」（『本朝文粹』巻八）の中で語った、「公」の領域（公宴での作詩）よりも「私」の領域（独吟独作）を重んずる、という作詩態度の転換に関する宣言を手がかりとして、白居易の作詩における「公」と「私」とを比較しながら、本論文で注目する点を提示した。即ち、平安朝詩人の作詩態度における公から私への変化と、それに伴う詩風の変化である。この二点を念頭に置きながら、長谷雄に至るまでの平安朝詩史の変遷を整理してみた。

白居易の作詩における「公」は、政治や社会の問題を批判する「諷諭詩」の制作を意味するが、こうした認識は平安朝の詩人には、ほとんど見いだせない。勅撰三集の時代には、「文章経国」という理念の下、漢詩文の制作の意義が国家経営に結びつけられ、詩人たちの公的価値も保証されていた。当時の詩人たちにとって、天皇が主催する詩宴・遊宴に参加し、帝徳讃美（聖君謳歌）や聖代謳歌を主題とする詩を作り、文運隆盛の日本の治世を国内外に標榜・演出することが、彼らの作詩の第一義であった。今日の我々が慣れ親しんだ「私」（自己の私的心境など）を詠出するのは、決して自由にできたことではなかった。

第一部第一章「詩臣」としての島田忠臣において、「文章経国」思想の退潮後、「詩人無用」論が言い立てられ、詩人の存在理由が疑問視されるなか、忠臣が（四時に天皇の恵みを歌う）「詩臣」の首唱者として、詩人の公的価値を見いだそうとしていたことを示した。従来、忠臣には菅原道真のような「詩臣」を実践する姿は見いだせないと言われてきたが、本章では通行本の『田氏家集』に採用されていない「詩臣」の用例を手がかりとして、忠臣の応制詩の詩型と応制詩における「個」の表出などの分析を行い、忠臣の「詩臣」観を明らかにした。

第二章「島田忠臣の不遇と「大隠」においては、忠臣における「仕」（公）と「隠」（私）を検討した。勅撰三集時代の文人と違い、忠臣の時代になると、宫廷詩人と

して天皇に仕えながら軒昂たる経国の志を高揚して国政に参画することは、もはやできなくなってしまった。こうした中、忠臣は、白居易文学を学びながら前代の文人の異なった処世観と生き方を摸索していった。本章は、官途に恵まれていない忠臣の不遇感に着眼して、彼が「大隠」という生き方を確立したこと、自適逍遙の心境を獲得したこと、そして自適空間を造営したことについて考察した。

第三章 「島田忠臣の交友と白詩」では、忠臣の交友関係（私生活）に注目した。

主に忠臣の詩作にみえる、藤原基経や菅原道真との交友などの検討を通して、忠臣がいかに白居易文学を利用し、自らの交友世界を作りあげてきたかを明らかにした。

第四章 「島田忠臣の哀傷詩について——和と漢のあいだ——」においては、人の死を悲しみ悼む忠臣の「哀傷詩」を取り上げて、その詩才の特異な一面を明らかにした。本章では、中国の哀傷詩との関係を述べたほか、日本の挽歌・哀傷歌の発想や詠法を忠臣が取り入れていることも示した。さらに、中国にも日本にも見いだせない忠臣の独自の詩想の展開についても考察した。

第二部第五章 「律詩の詩人」としての始発——省試詩の習作の再検討——」では、菅原道真の二つの省試詩の習作「賦得詠青」と「賦得赤虹篇」を検討し、道真が当初宮廷詩人としての道を目指していたことを確認した。この二つの習作の詩型や押韻の意義については、すでにさまざまな検討が行われてきたが、内容そのものの研究はまだ不十分だと思われる。特に、道真が白居易の諷諭詩から新たな典故を案出したことは、あまり着目されてこなかった。

第六章 「讃州客中詩」の再検討」において、道真が讃岐守時代に制作した諷諭詩的な作品の検討を通して、「讃州客中詩」全体の再評価を試みた。白居易の作詩における「公」は諷諭詩の制作を意味するが、白居易の諷諭詩を模倣することがあまり見られない平安朝詩史においては、道真は異例と言わざるを得ない。本章では、白居易の諷諭詩との比較研究という従来の視点のほか、白居易の左遷時代に詠まれた感傷詩の受容という視点を導入して、「行春詞」と「路遇白頭翁」を考察した。両作品は、いずれも公的な性格を有する諷諭詩的な作品として扱われてきたが、その作品の背後には、実は道真の国守としての立場と詩人としての姿勢の葛藤が見られること、つまりここに「私」が存在していることを明らかにした。

附章 「寒早十首」の再検討」では、「寒早十首」の背後に存在する「私」を考察した。まず、「同諸小児旅館庚申夜、賦静室寒灯明之詩」を取り上げ、そこに劉禹錫

の不遇逆境時代の詩作の影響があることを明らかにし、「寒早十首」が創出された前後の時期の道真の不遇感を確認した。そして、「寒早十首」が採用している「次韻式連作」という特殊な詩型に注目した。この詩型は、白居易・劉禹錫・元稹の晩年の唱和詩群「春深二十首」を模倣したものと言われてきたが、本章では、この詩型が元稹が通州司馬左遷時代に創出した自唱自和の形式であることを指摘し、道真がまさにこうした自唱自和の形式に共感して「寒早十首」を創出したことを示した。

第七章「諫臣」としての軌跡においては、道真の「諫臣」としての軌跡を検討した。従来の研究は、道真が詩の諷諫の使命を終始実践している、ということをも前提としているが、本章では、道真における詩の諷諫の使命と実際の諫言行爲に焦点を合わせて再検討し、道真が天皇に諷諫を行う「諫臣」としての姿勢を、寛平三年に初めて表明したことを確認した上で、寛平五年以降、次第に脱政治的風流志向への傾斜を深めてゆく宇多天皇に対して、実際の諫言だけではなく、詩文をもつてしても諷諫することに努める姿勢に注目した。また、そうした諷諫の姿勢には、道真自身の葛藤も内包されていることを明らかにした。平安朝詩史を俯瞰すると、そのような「諫臣」の姿は、道真にしか見いだせないものである。

第三部第八章「紀長谷雄の「詩言志」宣言——「延喜以後詩序」を読み直す——

においては、『本朝文粹』（巻八）所収の「延喜以後詩序」を手がかりとして、長谷雄の作詩態度の変遷過程を明らかにした。本章ではまず、この「延喜以後詩序」の通行本の本文に、同じく『本朝文粹』（巻八）所収の「沙門敬公集序」の本文が一部混入したままになっている誤りを指摘した。その上で、「嘆白髪口号」などの詩作を検討して、長谷雄の詩風転換を確かめた。最後に、長谷雄の「対殘菊待寒月」詩序（『本朝文粹』巻十一）をあわせて検討した上で、延喜以後の長谷雄が、「詩臣」として活躍してきた「公の詩言志」の世界とも、昌泰年間前後に形成されつつあった詩人派の間の「私の詩言志」の世界とも訣別して、「独吟独作」という「個の詩言志」の世界へ閉じこもっていった軌跡を明らかにした。

附章「延喜以後の長谷雄の公宴詩について」において、前章で触れなかった長谷雄の延喜以後の公宴での作詩状況を考察した。特に、延喜二年作の「九月尽日惜殘菊」詩序（『本朝文粹』巻十一）を分析し、詩友の道真が左遷されて逝去する前後に、長谷雄は公宴での作詩に対してかなり消極的な態度を取っていたことを明らかにした。